

かいころく

—工女編—

【登場人物】

- ・あと…主人公の女性
- ・きゐ…あとの母
- ・きぬ…あとの祖母
- ・まゆ…あとの娘
- ・募集人…女工募集人
- ・男…茶屋で出会う男性
- ・若い男…茶屋で出会う男の連れ
- ・先輩…工女仲間
- ・婦人…戦後に都会から訪ねてきた女性
- ・女性…隣の家の長男に嫁いできた花嫁
- ・義父…あとの義父
- ・義母…あとの義母
- ・孫…あとのモダンな名前の孫

【あらすじ】

かつて、この国の殖産興業を支えた製糸業の工女たち。その実態を描いた本「女工哀史」によって、彼女たちの劣悪な環境と、悲惨な人生が、のちの世間に強く印象付けられました。しかし、その一方で「女工哀史のような悲惨な人生じゃなかった」という言葉も多く残されています。では、実際はどうだったのか？

物語は、1900年に生まれた「あと」という一人の女性の視点を通して描かれます。養蚕農家に育ち、製糸工場へ働きに行った女性たちの、日々の生活や、糸引きの手つき、工女同士の交流を取材し書き残すことで、大正〜昭和にかけてのこの国の女性の生き方を考えます。

…

一人のおんなの手が、空をかるやかに動いている

赤子がなにかを求めるように 所在ない 柔い手には そのうちに

すこしずつ つよさが宿りはじめ ほそい指の先に やつこのことで なにかを掴む

なんびやく なんまん なんおくもの いのちを糸に変え 永らえた指たち

あつい湯に ふやかされ 老いた手先には

母の手の厚さも 草木のかるやかさも 雪の厳しいつめたさも 生まれたての子のね

ばりけも すべてのことが ありました

これはかつての糸をつむいで生活してきた女性たちの

今日に続くいつかの私たちの物語

【序章】

ちいさないのちの固まりがひとつ、ただぼつんと居る
時が来ると、そのいのちは生きることをはじめ

身体は少しずつ上下に動きはじめ、

やがてできたばかりの鼻、口、耳から空気が出入りする音がかすかに聞こえる

場に空気が満ち満ちたとき、ふたつの手が、すうっと身体から伸びる

手のひらが、花が日光を全身で浴びるかのように、大きくひらく

空をつかみ、ふたたびゆっくりとひらく

手それ自体が呼吸をしているかのような動き

何度も繰り返すうち、動作に力強さが宿っていく

ると その手は、いつでも、よく動いた

何かを求め、つかみ、離すようなしぐさ

ると まだ何ものでもなかった頃から、その手は、よくよくはたらいた

徐々に動きの間隔が狭まってくる

手のひらの開きが頂点に達したとき、ふっと力が抜ける

身体がひとつ、産み落とされている

【第一章】

胎児の目はまだ開かない

顔のまわりを手で確認するような動き

きぬ …ると…ると、るとや

手は、身体は動き続けている

ると 幼い頃、まだ目もよく開かぬ頃、私を呼ぶ、声を聞く

きぬ …ると…ると、るとや

みと それは、母ではなく、もっぱら祖母の声だった

何かを求めて動く手

みと 休む間もなくはたらきづめの母に変わって、祖母は私をよくかまう。多忙で相手
ができない時には、繭をひとつ、この柔い手ににぎらせた

手のひらに繭をぎゅつとにぎりこむしぐさ

みと かさかさして、かたくて、あたたかい。その感触が手のひらにある。幼いわたし
は、繭をにぎると決まって静まりよく寝たという

身体に徐々に芯が通ってくる

みと 目を重ねると、指が自在に動き出す。指と指とでつまんだ繭は、そのまま身近な
玩具になった。ええいと振ると、音が鳴る。カラカラ、カラカラと響く音色は、
ひとり遊びの寂しい心をなぐさめた

足腰がしっかりして、子ども然とし、そのまま立ち上がる

みと そんな繭が、どうやらこの家にとって重要なものらしいということは、言葉を話
せるようになった頃にわかってきた。父、母、祖母、私と小さな弟の五人家族の
生活は、それぞれが精一杯の仕事をするので何とか成り立っている

父親の幻影を追う

みと 父は、村へ里へと仕事があればどこでも行く。木を切り、狩りをし、山を渡り歩
いては炭を焼き、馬を使って荷運びもした。朝早くから出かけて行って、季節が
変わるまで帰らない。母は、その間もひとりできちんと家を守った

家の姿を描く

みと 家では、もっぱら蚕と田んぼ。隣近所と協力しながら、繭を取り、稲を育てて食
いつなぐ。「男手のないのにようようやっている」と村でも評判だった母。私は、
母の眠る姿を見たことがない。朝のまだ日が昇らぬうちから、夜はとつぶり更け
るまで。その手は、休まる時を知らなかった

母の手を見る

もと 冬の終わり、次の蚕に病気が出ないよう障子を張り替え消毒をする。終われば大量の養蚕道具の手入れ。桑摘みの竹かご、蚕をのせるむしろ、竹枠などを川で洗って天日で干す。背負い台に積んで河原まで何往復もする母を、私は必死で追いかけた。この時だけが、幼い弟から母をひとりじめできるからだ

河原で仕事をする母の隣に腰掛ける

もと まだ冷たい川の水に手の感覚を奪われながら、手際よくぎぶぎぶ道具を洗う。たわしで表面をこすると、昨年の汚れや、巻き付いた糸がきれいに流れていった。河川敷に立ってかけられた道具たちに、日が反射してきらきら光る

母のむこうに来訪者を見る

もと しかし、母と二人きりの時間は短い。何せ集落一体が養蚕をしている人ばかり、みな同じ時期に川へ来る。この頃の女性たちは、顔を合わせると決まって同じことを囁いた。「そろそろか」「もうじき抱くか」「そいじゃあうちも始めよか」

女性たちのしぐさを真似る

もと そう言って、みな一斉に蚕を「抱く」。菜種に似た小さな卵を、やわらかい紙に包み、つぶさないように綿入り着物の重ね着の間にはさんで温めた。ある者は背中に、ある者はおなかの方に「抱き」、自分の体温を分け与えながら孵化を促す。それはまるで、母親が我が子を愛情かけて育む様子そのものだ

孵化した蚕種を育てる様子（掃き立ての仕草）

もと うすい青色だった卵は日が経つ毎に色づいて、五、六日で黒々とした頭が見える。中から小さな毛蚕けこが生まれ出てからも世話は続く。病気になるやすいので常に観察を怠らず、空気を入れ替え、葉を補給し、糞はこまめに取ってやる。まるで妊娠中の女性が様々な掙あざむに縛られるように、約束事が沢山あった

世話の様子を続ける

もと 世話の前には必ず手を洗う、蚕を驚かせないよう動作を静かにする、きれいな言葉遣いを心がける、においの強いものは食べない。不思議だったのは、初めて蚕を桑の葉にうつすとき、人間の子が生まれた時と同じ儀式をすることだ

儀式の再現をする

もと マメに育つようにと、大豆のご飯を炊いて神棚に上げてから皆でいただく家や、米の飯に豆腐汁、魚をつけて食べる家もある。どれもこれも、蚕が始まると一年で一貫やせてしまうという女性たちに、何とか精をつけさせようという知恵だった。蚕育ての大変さは、まさに子育てと同等なのだ。手ごろな大きさの木で人形遊びを始めた頃の私は、何気なく母に訊ねたことがあった

ふたたたび母のとなりに座って聞く

もと おっかあ、お蚕さんは、おんなの仕事なんだね

もと、母の目をじっと見る

もと 蚕にせわしく桑の葉をやる母は、びっくりした顔をして、手を止めこちらに近づき言った

きみ いんや、もと、それは違う。桑の木の手入れをしてくれるおっとうがいてこそ、お蚕さまはできるんよ。男も女も、みんなでやるんよ

もと 確かに、蚕が始まる時期になると必ず父は帰ってきて、桑畑の手入れを始める。大きく育った桑の木に登って枝をがしとはさみで切り落とす姿は、いかにも男仕事と言った様子で恰好よかった

ふたたたび情景を描いていく

もと そうやって、男も女も一丸となって、今年もまた蚕が始まる。春から秋の終わりまで何度も何度も蚕を飼った。田植えと稲刈りに重なる時は、寝る間もないほど大変だ。冬にだって休みはない。翌年の夏に使う草鞋や笠の編み物など、仕事は常に沢山あった。父も母も、狩猟やほかの家の手伝いでほとんど家にいない

冬の到来を身体で感じながら囲炉裏の近くへ寄る

もと その間、もっぱら面倒をみてくれるのは祖母だった

祖母の身体を表していく

もと きぬ、という名の祖母は、その名の通り糸に縁ある人だ。生まれた家にも蚕がい

て、糸取りもしたし、機織りもやった。母に「きぬ」という名を、私に「もと」

という名を付けたのもこの人で、「ふたり合わせて「きぬと」になるでな」と笑
う

祖母の動きを再現する

もと 祖母は冬仕事として、もっぱら糸や布を触っていた。中でも私が心惹かれたのは、

繭から糸を取る座繰りの仕事だ

慣れた手つきで動作を始める

上州座繰りを操るうごき

もと 「さあ、やるかね」という言葉とともに、薄い座布団の上に小さく正座をする。

身体の前には座繰りがあり、左手でハンドルをくるくると回しながら、右手で煮
え立った鉄鍋から数本の糸を引き出していく。撚りをかけながら一本の糸に仕
上げる。座繰りにはめた木の枠が糸でいっぱいになると、慣れた手つきで次のも
のに付け替える。折を見て、水を張ったたらいに手を差し込み冷やす。この時も
手は休むことを知らなかった

もとが隣で見ている様子

もと リズミカルに回転する歯車、場に充滿する蒸気、そして数十粒の繭から伸びる細

い糸をするすると一本にまとめる手さばき。見続けているうちにぼーっとして

きて、私は、気づけば指先を鍋の中に入れていた

もと あっっ！

きぬ こらあ、もと、何してるか

もと 祖母はおどろいて、水を張ったたらいを差し向ける。：祖母が手を入れていた鉄
鍋は、指が溶け落ちてしまうかと思うほど熱かった。彼女は仕事の手を止め、両
手で私の小さな手を包み、水につけて優しくさすり始めた。笑いながら、「なあ
に、もとも糸引きをやりたくなかったんかね」と言う

手をさする動作がつづく

もと ばばさは、こんな熱い湯に手を入れて痛くないの。どうしてこんなにも熱い思い
して毎晩毎晩糸ひくの一目に涙を浮かべて尋ねる私に、祖母は笑顔で語りだす
きぬ いま、ゐとが着ているそのはんでんも、ばばさがきているこの着物も、元は一本
の糸だった。それは、大きく育った麻や綿、お蚕さんの吐く糸でできている。着
るものは自然に出来上がるのではなく。いろんな手間がかかるのさ。家に嫁に来
た女はね、家の周りでのくらの麻や綿が採れるのかを覚え、いつ、どう配し
たらばみんなの服を不足なく作れるか、きちんと考えておくんだよ。おらの頃は、
娘が生まれた時から、その子が嫁入りする時の着物の計算をしたものだ

もと そして、座繰りの道具に目をやって言う

きぬ 家というところはね、それぞれが少しずつ熱い思いや苦しい思いして、みんなの
ために働くのさ。父様だって、ゐとやみんなのことを考えながら熊を追っている
し、母様もいつも忙しくゐとは寂しいかもしれないが、食うに困らぬよう必死に
はたらいっている。だからばばさも嫁入り道具のこれを使って、みんなの着るもの
の支度をする。ゐとももうじき、みんなのためにはたらくようにならねばな

もと、真つ赤になった自分の手を見ながら不安そうな表情

もと 祖母の手はふたたび糸取りをはじめ

きぬ 家で糸にしている繭たちは、汚れもの、小さいもの、どれもできそこないで売れ
ぬ繭ばかり。でも、丁寧にほぐし紡いでいけば、いつか立派な着物になる。だか
らゐとにもきつとできるさ

もと、きぬの動きを真似ていく

もと それからは冬が来るたびに、夜なべ仕事を手伝うようになった。私の臉が重くな
ってくると、決まってむかし話をはじめ。必ず語られる蚕の伝説は、お上の人
が、民に養蚕を広めるために生まれたそうだ。何度も聞くとさすがに飽きて、あ
る夜ついこう聞いてみた

もと、手を動かしながら話す

もと むかしむかしはわかったけれど、お蚕さんの新しいお話はないの

悲しそうに微笑む祖母

きぬ そうねえ：新しいのはとんとないね。今は皆がこぞってお蚕さんをやっているが、本当は、むかしむかしに流行ったきり、あいだがずっと開いていたのさ

きぬ えっ：意外なことに声が出た。あたり一面の桑畑も、昔々からかと思えばそうで

きぬ だから新しいお話は、どうだかねえ、これから誰かが作るのでねえか

きぬ どうして間がすっかりあいてしまったの

きぬ えっ

きぬ 祖母は驚き、当たり前だという風に言った

―

突然ぶつりと話が途切れる

もと その時、ぱつと戸が開いて、見ると母がしろい顔をして立っていた

ただならぬ空気を感じるもと

もと その晩父は、冬の凍った川に落ちて、あつ、という間に死んでしまった

【第二章】

もと、十三歳になっている

あどけなさは影を潜め、きりりとした表情に変わる

もと そうして、大人をひとり失った我が家は、悲しむ暇もなくより一層忙しくなった。

まだ幼い弟は、さらに幼い隣の家の子どもの面倒を見る。私も父の代わりとはいかないまでも、やれることならなんでもやった。そんなある日、祖母が言った

きぬ このままでは埒が明かねえ。隣村に奉公に出るか、糸取りの仕事でお金を稼ぐか、それとも芸者になるか

来客の影を見る

もと 丁度その頃、集落に女工募集人が来た

募集人

どうですか、娘さんを製糸工場へはたらきに出しませんか。糸引きは楽な仕事で、寝るところも食べ物もきちんと用意されている。お給金も出て、親助けにもなりますよ

もと

行きたいか行きたくないか、ではなく、行かなければならなかった、この時の正直な気持ちを言うと、「ほかに仕様がなかった」というのが正しい。でも、親助けという言葉に、心がひかれたのも確かなのだ

お辞儀をして、家を出るしぐさ

もと

十三になるこの年に、私は初めて村から出た

小高い丘から郷里の方を見渡す

もと

出発の朝、数少ない着物からもっとも気に入ったものを選んで着て、母に髪を結ってもらった。口を開けば泣いてしまいそうで、お互いに一言もしゃべらない。そのまま静かに家を出て、隣村からの何人かもし一緒に、工場からの迎えの人とともに四里の道を歩く。丘を越えるとき、遠くにさっきまでいた村を見て、母と、祖母と、弟を思い、涙がひとつこぼれて落ちた

振り切るように歩き出す

もと

そこからまたひたすらに歩く。途中、まるで葬式のように暗いわたしたちを見かねて、引率の人がちかくの茶屋で休憩をくれた

椅子にちいさく座るもと

もと

「しばらくそこにおるように」と言われ、工場の人はどこかへ消えた。あついお茶をすすっていると、隣に座った男に、おいと声を掛けられる

男

お前さん見たところまだ随分と小さいが、どこへ行くのか

もと

わたしが「糸引き工場へ働きに行く」と言うと、男の顔色がさっと変わった。「女工になるんか、かわいいそうに」と言う

もと、男の方へ向き合って聞く

もと

かわいいそうとはどういうことか

男

なんだ、お前さん知らないのか。女工が工場勤めで酷い目にあってることは、こ

の辺りじゃ皆の知るところよ。朝早くから夜中まで衛生環境のわるい工場です。たすら働かされ、休みも飯も満足にもらえず、過労と結核でつぎつぎ倒れ、故郷の土を踏むことのないまま死んだ女工がどれだけいるか。脱走を試みても、連れ戻されるか、実家の繭をすべて没収され、一家で倒れる結末よ。追い詰められた最後の道は、この世から逃げるしかないわいな。早朝に工場近くの川や湖に近寄りなさんな。よくよく女工の死体が出るぞ

私は、あまりにも聞いていたのと違う話に、いつの間にかかたかたと震えが止まらなくなっている。しかし男は気づかず尚話を続ける

男　まあ、女工だって百姓だって同じこと。上に立つものは、下の命なんてなんとも思わない。先ほどだって、その峠でぼろぼろ泣いてる婆がおり、聞いてみると「夏のあいだに苦勞して作った米を、なしてこうして背負って地主に差し出すのかと思うと、情けのうて情けのうて」と言う。百姓のいのちなんかかるい。女工のいのちももっとかるい。どこでも下の者はこき使われて、捨てられるのを待つだけだ

真っ青になって聞いていると、男の連れが現れた。すっと背の高い若い男で、「小さい人をあまりいじめるなよ」と言う。言われた方は、「本当のことを教えたままでだ」と言い張って聞かない。すまないと謝って、若い男はその男を連れて席を立つ。去り際に、先の男が言い放った。「俺ら下の者はなあ、はたらくしかねえ。一所懸命に手動かしてはたらくしか、道はねえんだよ」

みと、じつと手を見る

みと　その言葉は、なぜだかそのあといつまでも、耳の中で鳴って止まなかった

工場に向かって歩き出す

【第三章】

建物の外で一瞬ためらい、えいやと入る

みと　工場、というものを初めて目にしたとき、巨大な建物と、ずらっと並んだ人の多さに、驚きすぎて声も出なかった。次に驚いたのは中の暑さで、肌にとわりつく熱気は、繭を煮る釜の中でくつくつとたぎる、セ氏60〜80度の熱湯のせいだ。その蒸気が大粒の水滴になり、天井からぼたぼた落ちてきて、服のあちらこ

ちらを濡らす。蛹を煮る独特のにおいが鼻につき、隣にいた見学者は、気分が悪いと座り込む

もと、働いている人の動きを見る

もと そんな環境の中でも、働く人々の姿は凛々しかった。最初の一月は、機械の隣に立ち、先輩のはたらいているのを一心に見続ける。煮た繭を小さな箒でこすって糸口を探し、すばやく機械に通し、撚りをかける。機械が動く、ゆでられた沢山の繭が釜の中で踊り、生糸がするする巻き取られていく。繭が透明になって中の蛹が見える頃、ひゅつと新しい繭を足す。その手さばきの華麗なこと！糸目を切らさないように、つねに全ての繭が揺れ動いているかと目をこらす。その目の、真剣なこと！それを一日何時間もひたすらに続け、終わる頃には、傍らに繭から出た蛹が山のように積まれていた

作業に入る

もと 実習が始まると、着物に帯を締め、その上から割烹着を着て作業にあたる。「こちらの釜で」と指示された場所に立った時、いよいよ私も糸取りをするのだと緊張した。繭を煮て糸口を探し、機械に通し、撚りをかけては糸にする。手さばきは、先輩のそれには到底及ばず、最初のうちはほとんど繭をだめにして、監督に何度も怒られた。一等怖いのは呼び出しだ

作業を中断して呼び出される様子

もと 暗い別室で、私の取った糸を光の出る機械にかけて、むらがあるのをまざまざ見せる。糸が細くなったり太くなったりすればだめで、かならず均一にせよと言う。工女内で順位をつけられるのはつらかった。一番顧客のアメリカさんが、ぴしつと細い、均一の糸を求めるのだそうだ

作業を再開する

手はいつの間にか、座繰りの動きを現している

もと 「お蚕さんは、最初の糸は太くって、後々になると細くなる」。いつかの夜なべで、祖母が言った。糸巻きを回す速さや撚りの加減で、糸に個性が宿るのさ。必ずその手でしか引けない糸があり、それは一人ひとり違うんさ

糸を引く美しい手を繰り返す

もと …でもね、ばばき。ここでは個性はいらないんよ。「糸をいかに均一にするか」の戦いなんよ。そのすべてはこの指先にかかっていて…：そのなのだ、機械製糸と言うけれど、結局のところこの国の糸の質は、女の指先が頼りなのだ

指先を見る

もと 目を重ねる毎に、糸の出来は上達する。それと引き換えに、熱湯につけ続けた手はだんだんと痛み、湿疹、炎症が引かなくなった

手を痛そうにこすりながら寄宿舎に帰る

もと 工場の隣にある寄宿舎は、30人が布団を敷き詰めぎりぎり入るような所だ。こんな大人数の同年代と生活を共にするのは初めてで、戸惑うことも多かった。疲れているはずなのに、どこかずっと緊張していて、いびきや寝言ですぐ目が覚める。ただ、こころぼそかったのはみな一緒で、ある夜「おっかあ、おっかあ」と呼ぶ声で目を覚ますと、隣の人が眠りながら泣いていた

その工女に布団をかけるしぐさ

もと みな不安なのだ。そういう夜は、決まって家のことを思う。母は、祖母は、弟は元気だろうか。村のみんなに変わりはないだろうか。わたし一人がいけない分、多く食べられているだろうか。こういう晩は、私たち工女に使われる「口べらし」という言葉がいたく身に染みる

食事の席の身体になる

もと 工場に来たばかりの頃、感動したのが食事だった。家では一日二食だったのが三食になり、麦飯だったのが白いご飯になった。ただ一か月もたつと、米と汁と漬物ばかりの食事にも飽きがくる。汁は心ばかりのフキやウリが入っているだけで、漬物はもっぱらたくあんだ。ある時浅漬けを食べたいと言うと、工場の者に聞かれていて、「そんな手間のかかるものができるか」と怒られた。この数の食事を用意するのがどれだけ大変か。聞けば多くの工場ができた今、どこも食材の確保で躍起になっている。「新しい時代だから」とその人は言った。私は裏山で採った山菜や、父の捕った川魚の食事を思い出し、心底せつない気持ちになっ

た

振り切るようにふたたび糸引きの手つきに戻る

もと 毎日毎日朝早くから日が落ちるまで、ひたすら糸を引き続ける。顔を上げると、糸が湿気らないようにと、一度も開いたことのない窓から、爽やかな秋晴れが広がっていた。外の世界はあんなにもひろい。その青が美しいほど、心はずしんと重くなる

糸引き動作をやめて集合する

もと そんななか、一等嬉しかったのは、やはりお給料をもらう日だった。せっけんやちり紙などの費用を引くと大して残らぬ金額でも、両手のひらの上にあるお金の重さに、じわじわと活力がわいてくる。村にいたころには考えられなかった「自分の手で稼ぐ」ということを、私はとうとうやったのだ。ああ、早く届けたい。今すぐ母に見せてあげたい

ふたたび糸引きの動作に戻る

もと その後もこつこつはたらいて、とうとう正月の帰省の日がやってきた

工女仲間とすれ違いながら歩く

もと 工女の中には土産を買って帰る人もいたが、うちにはそんな余裕はないと、稼いだお金をそのまま胸に抱いて帰る

歩くスピードが段々と早くなり、しまいには走って家に向かう

もと あれだけ夢に見た村が、目の前にある。涙よりも嬉しさが勝った。見ると、峠の先に母、祖母、弟が三人並んで立っている。…ただいま帰りました！

四人並んで家に帰る

もと 久しぶりの家は、想像よりもいくらか小さく感じた。それでも心落ち着いて、やとぐつすり眠りにつく。いつものように、家事や夜なべをして暮らす。それまでと違うのは、給料袋を渡したことだ。「母さま、これがお給料です」と差し出

すと、母は「ご苦労様でした」と受け取った。その後はにこにこほほ笑むばかり。祖母も「うん、うん、ご苦労様でした」とだけ言い、工場暮らしの心配ばかりする。もっと嬉しがる様子を期待したので、どこか拍子抜けだった

養蚕の手伝いのしぐさ

もと　しかし、村の人が言うには、私のいないところで祖母は「めとはすごい」「めとがこんなに稼いで帰ってきた」と村中に自慢して回っているという。そう聞くと、今度はなぜか胸が痛んだ。とてもじゃないが「むこうの暮らしがさみしくてたまらない」と言うことはできず、ある夜には得意になって、工場での糸引きの動きを再現して見せたりした

工場の糸引きを再現してみせ、笑うもと
笑いがやんで、現実が戻ってくる

もと　あつと言う間に工場へ戻る朝がやってきた。支度をし、ふと神棚を見上げると、何かがある。近づくと、そこには、母に手渡した給料袋が供えられていた

何かを感じるもと、ほほ笑む
神棚に向かって手を合わせる

もと　…行ってまいります

工場に向かうもと　表情が引き締まっている

もと　この最初の帰省を経て、自分の中で何かが変わった

工場へ入り糸引きを再開する

もと　工場勤務の女子たちは、色々な所から来た者同士、御国言葉が違っている。同郷から数人で来ている人もおり、そうした会話を聞きながら、一人の私は言葉がわからず、みじめな気持ちでいっぱいだった。しかしやはり同じ年頃の若者同士、共に暮らすうちに話すようになった。聞けば出身は作物が満足に取れない地域ばかり、つまり家の環境はみな似ていて、それゆえ直ぐに打ち解けた。家で蚕をやる人も多く、手伝いで学校に行けず字が書けない人もいる。時には、わかる人が教えることもあった

一人が、もう一人の手に自分の手を重ねる

もと 字がわからない人の手に、字のわかる人がその手を重ねる。まずは、自分の名前。つぎに、挨拶。紙の上に字が表れる度に「わあ」という声が上がった。文字を覚えた人たちは、何度も「ありがとう、ありがとう」と繰り返す

数人で歩き出す

もと 一方で、みじめな気持ちになることもあった。その頃、町は工場のおかげで賑わっていて、活動写真に劇場に本屋、写真館まであった。数人で日用品を買いに出た時、写真館を覗いていたら、通りすがりの男性たちが、私たちを見てこう言った。「学のない貧乏百姓が」「美人でもないのに写真など写してどうするか」

止まっていた足をふたたび進める

もと 帰り道、誰もが無言で歩いていると、一人が「きつと嫉妬しているんだわ」と言った。「私たちが立派に働いているのを見て悔しいのよ」「女が稼いでいるいま、里に帰れば男は頭が上がらないもの」「そうよそうよ」。声はどんどん大きくなった。「私ら手先は汚いけども、日なたに出ないぶん色白よ」「毎日蒸気に蒸されているから、肌や髪の色つやがいいもの」。そう言って互いに励ましあった

歩く速度が次第に速くなる

もと 工場に出て数年も経つと、糸質や出来高の個人差がどんどん大きくなっていく。百円工女、二百円工女と言われる人も出てきて、郷里の父母はそれで田畑を買うのだと言う。しがない農村の女が、家を救う時代がやってきたのだ！

近くの橋に行き、川の流れるを見る

もと 工場の近くには、決まって川が流れていた。水量豊かな水の流れを見ながら、気心知れた仲間と話をする。繭を煮た後の熱湯が、工場裏の用水に流れ込み、白く泡立って帯状に見えた

もと、隣にいる工女に話しかける

もと 私ね、工場の暮らしがまさかこんな風だとは思わなかった。そりゃあ仕事はつらいけど、ほかの地域の言葉も知れて、新しい文化に触れて、随分楽しい目をさせてもらってる。実はここへ来る前、ひどく脅されたことがあったのよ

じっと相手の表情を見る

もと すると、その先輩は首を振り、こちらをまっすぐ見て言った

先輩 あなたが聞いた話はすべて本当。私たちの働き始める少し前までは、製糸工場というのは今と比べ物にならないくらいむごいところだったのよ

もと そして、当時の女たちが声を上げ待遇の改善を求めたり、工場法というものが定まったりして、随分と改善されたのだと言った

先輩 先人たちが必死に深夜業をなくせ、休憩をつくれ、ましな食事を食わせろと言いつつ、共にたたかって生活の向上をはかってきたの。その延長に私たちはいるの。だから、私たちは誇りをもってはたらかなくちゃ

自分の手をじっと見つめ、ふたたび糸引きの動作を始める

もと そうして工場ではたらき始めて10年になろうかと言う頃、実家から連絡が来た。寝たきりだった祖母が、とうとう亡くなったという。そこには「そろそろ見合いをせぬか」という言葉が添えられていた

【第四章】

白無垢姿で道を歩くもと

隣には新郎が歩き、後ろを村中の人々が続く

もと 嫁いだのは、山をひとつ越えた場所にある、となりの村の農家だった

家に入り、正座する

もと 見合いの打診が来た翌年、迷うことなく工場をやめた。工場勤めは花嫁修業のよなものだったから、結婚を機に辞める人は多い。その後も引き続き製糸工場へ行く人もあったが、私は家の仕事に専念することにした

盃を受ける

もと　そこは、私の家より大きな田んぼを持ち、大規模な養蚕をやる家だった。夫になる人は、私より三つ年上で、背は小さいがよくはたらき、気の優しいひとだ

帯を締めて働く様子

もと　養蚕は、夫と夫の兄弟、義父に義母、親戚一同がはたらきにはたらいて何とか回っている様子だった。そういうわけだから、蚕を育て、糸引きもできる私はとも喜ばれた。くたくたになって床に就くとき、家の中に染みついた桑の葉や蚕のにおいが、生まれた家と同じことに気づく。懐かしい気持ちが沸き上がった

お腹に手をやる

もと　そんな忙しい生活は、子どもが生まれてますます加速した

子どもをあやす様子

もと　生まれた赤子は「玉のような」という言葉がぴったりの丸々とした女の子で、「まゆ」と名付けた。まゆ…まゆ…まゆや。呼ぶと手がびくくと動く。赤子のその手の所在なさよ。握ると、まっさらなやわらかさに驚いた。この手が汚れずむぶぶに、健康にはぐくまれるようにと願う

突然、ほかの人物が赤子を抱く

もと　しかし、娘との時間はそう長くは続かなかった。この辺りでは、子どもの世話は姑がやる決まりなのだという。まだ生まれて間もない我が子を置いて、働きに出る。朝も夜も、私が見るのは寝顔ばかり

もと　まゆ…まゆ…まゆや

眠っている子どもの頬や手をさわる

もと　もしかしたら、母もこんな気持ちでいたのだろうか

もと、頬の涙をぬぐう仕草

みると 　いつか工女仲間が言っていた、「犬猫でさえ自分の子どもと一緒にいるのに、どうして人間は子どもをよそへやるのだろうか」――つらいのは子どもばかりと思っていたが、それは母親もまた同じなのかもしれない

子どもの成長を見守るようす

みると 　子どもが自分の足で立って歩くようになった頃、夫が、桑の木から落ちた。年寄りに変わって、巨大な桑の剪定を、一人で受け持った矢先だった。一命はとりとめたものの、足をすっかり悪くして、これまで通りにはたらくことは難しい

看病する様子

みると 　それでも、去年と同じだけ蚕を育て、稲を刈らなければ。なんとか生きていくために、私はさらに夫の分も、懸命にはたらいた。その生活に慣れてきて、子どもも活発になった頃、まるで入れ替わるように、実家の母が亡くなった

電話を耳に当てる

みると 　…うん、うん。わかった

電話を握ったまま話す

みると 　母は、その日も遅くまで働いて、少し疲れたから休むと言って、そのまま眠るように逝ったという。弟は、そちらも忙しいと思うから、葬儀はこちらで済ませておくと話した。…それと

弟 　母さんも亡くなったので、蚕はもうやめようと思う。それに際して、家を、食料畑にしてもいいだろうか。村の人に土地を貸して、家計の足しにしたいんだ

電話から耳を話す

みると 　私はもうこちらの家の人間で、許しを請う必要はない。けれどもわざわざ尋ねる弟に、切ない気持ちがある

静かに頷き、受話器を置く

手ぬぐいを頭に巻き付け、はたらく仕草を始める

りと
蚕のざわめく家の中、桑畑までの長い道、夜なべの時に囲んだ囲炉裏。その景色が浮かんで消える。幻影を振り払うように、ひたすら身体を動かした。折しも国は他国と戦い始め、その波はこんな田舎にもわかるほどになってきた。家のために、お国のために、精一杯はたらくのだ。日々せわしなく、悲しんでいる暇もなかった。これでは父が死んだ頃の母とまるきり一緒だ。でも、これこそが供養なのだと思うようにした

背後に人の気配を感じて振り返る

りと
丁度その頃、集落に女工募集人が来た

募集人

どうですか、娘さんを製糸工場へはたらきに出しませんか。糸引きは楽な仕事で、寝るところも食べ物もきちんと用意されている。お給金も出て、親助けにもなりますよ

もう一度振り返って娘を見る

りと
気が付けば、娘はもうすっかり働きに出られる年頃になっていた

【第五章】

りと、仕事の合間に腰掛ける

まゆからの手紙を広げて読む

まゆ
拝啓 お母さま 少し蒸し暑くなってきましたがお変わりありませんか。最近
は戦地に送るための落下傘の糸取りの毎日です。日本軍の活躍目覚ましく、糸が
足りないということで、日が落ちてからも随分長いことはたらいっています。この
間、何度時計を見ても6時から針が動いていないことに気づきました。長く働か
せるために、監視が時計を止めていたのです。最近、昼休憩の後に皆で歌を
歌います。「男軍人 女は工女 糸をひくのも国のため」という勇ましい歌です。
昔は、米国のために糸を引いていたと聞きました。今では米国を倒すために作る
のだから不思議です。皆さん元気でいてください。またお手紙書きます。まゆ

りと、また別の手紙を開く

まゆ 今月から、工場内の土地で芋やかぼちゃを育てるようになりました。最近では工場
の食事もめっきり減って、前は白米だったのが麦飯になり、近頃は南京米の混ざ
ったご飯になりました。付け合わせはなく、あんまりお腹の空いた時には、糸を
取った後の蛹を取ってきて、かりかりに焼いたものに塩を振って食べています。
案外皆からは好評です。同級生が言うには、米国は新しく、つよい繊維を開発し
たのだそうです。これから先、紡いだ糸はどうなってしまうのでしょうか。今はた
だお国のために頑張りたいと思います。まゆ

もと、また別の手紙を開く

まゆ 突然のことで驚かれるかもしれませんが、私は結婚をすることに成りました。相
手はこの町の人で、工場の休みの日に偶然出会ったのです。歳は私の二つ上です。
ぜひ母さまにも一度会ってもらいたいです。ただ父さまの看病で忙しいでし
うから無理には言いません。みなさまお身体に気を付けて。まゆ

手紙を置き、夫の看病に行く

もと 戦時中の自由恋愛というのが、まゆらしくて微笑ましい。結局、わたしは床に伏
せるようになった夫の看病で行かれなかったが、夜なべをしながらこつこつと
準備した藤色の着物を送った。「おらの頃は、娘が生まれた時から、その子が嫁
入りする時の着物の計算をしたものだ」。その時がとうとう来たのだった。後日、
写真が送られてきた。まゆの隣に写っていたのは、背が高くて誠実そうな、軍服
姿の青年だった

ゆっくりと田畑を耕す動きにうつる

もと それから随分間が空いて、久しぶりに手紙が来た。あれからすぐに赤紙が来て、
彼は戦地で散ったという。空襲が激しくなってきたので、こちらに疎開するよう
に言った。しかしお国のためだからと、彼女は戦争の終わりの日まで、工場で糸
を引き続けた

耕す手を止め、振り返る

もと 終戦から、数か月たった頃。久しぶりに帰ったまゆは痩せていて、しかし顔つき
は随分たくましい。何と声をかけようか迷い、ただ「お帰り」と迎えてほほ笑む。

戦時中に桑畑を半分つぶして作った食料畑を、無言で一緒に耕した。たくさんの農家が養蚕から手を引く中、それでも義父は蚕を続けた。義母は、「養蚕は、あの人の生きがだから」と言っていて笑う

ふたたび耕す動作

もと こうして田畑を耕す度に、もういなくなってしまった人が浮かんで消えた。そしてまたあの声がある。「下の者はなあ、はたらくしかねえ。一所懸命に手動かしてはたらくしか、道はねえんだよ」

ふと人影に気づいて顔を上げる

もと ある日、畑の隅に、着物姿の女性が一人、立っていた。金色の美しい刺繍が施された着物を着ていて、殺風景な田舎の背景に浮いている。彼女は、か細い声で何かを話す

聞き取りにくく、近づいて耳を寄せるもと

婦人 申し訳ないのですが、芋を、少しばかり分けていただけませんか
もと 分けると言っても、収穫はもう終わっている。義父に相談すると、「入れてやれ。小さな芋なら残っているだろう」と言う。私がどうぞと言うと、女性はふろしき

に包まれた何かを、受け取ってくれと差し出した。その手があんまり綺麗なもので驚いた。白くて細くて、この辺りでは見たことのない、陶器のような美しさ。案内すると、彼女は草履と足袋で畑の中に分け入って、必死でくず芋を掘った。着物の裾に土がはね、白い足袋が茶色くなった。根っこのように細い芋をかごいっぱいに入れて、「ありがとうございます」と何度も何度も頭を下げて帰っていた。義父が、「都では、食べるものが何もないそうだ」とつぶやく。見れば、どこに待たせていたのか、小さな男の子の手を握って歩く女性の姿が遠くに見えた

もらったふろしきを広げる仕草

もと ふろしきを開くと、立派な刺繍を施した羽織が一枚、入っていた。その美しさに、思わずああ、と声が出た

表面をゆつくりと、何度も撫でる

みと　　ああ…ああ…こんなにも奇麗なのか、絹は…

まじまじと見つめ、その光沢に目を細める

みと　　私たちの育てたお蚕さんは、紡いだ糸は、こんなりっぱな形になって、人の手に渡っていたのだった

羽織に顔をうずめて、少し経つとまたふろしきに包みなおし、歩き出す

みと　　頂き物を仕舞おうと奥の蔵を開けると、そこには見慣れぬ着物があつた。よくよく近づき目を凝らす

まじまじと手に取って見、はっとする

みと　　それは私が娘にあげた、あの藤色の着物だつた。それが…真っ黒に染め直されて、蔵の中にあつた

みと、娘を思つて振り返る

みと　　……………

視線を戻し、切ない気持ちで着物に手をやり、抱きしめる

みと　　それから二年後、娘は見合いで結婚した

【第六章】

桑を運んだり、蚕を移したりと養蚕の動きを続ける

みと　　「戦後」を順調に重ねた頃、我が家に嬉しい知らせがあつた

エプロンを結びながら、何人かに挨拶する様子

もと 共に養蚕を続けてきた、隣の家の長男にお嫁さんが来ると言う。もう随分若い働き手がいなくなったので、皆心から喜んだ。どんな子だろうか。食べ物は何が好きだろうか。義母は「きっと必要だろうから」と、作業用のエプロンをこしらえた初々しい女性が入って来る
部屋の中を案内するもと

もと こつちが、お蚕さんのいる蚕室さんしつ。いま丁度繭をつくる前の段階だから、見てみましょうか

もと、女性を案内する
女性、蚕を目の前にして立っている

もと ほら、これ。このお蚕さんはもう糸を吐きかけているから、こうやって持って、こちらに移します

もと、やって見せる

もと よし、そうしたら、やってみましょうか

女性 あ……はい

女性、親指と人差し指で蚕を持つとする

女性 ……うう

が、どうしても触れない

もと あ、お蚕さんは強いから、多少強く持っても大丈夫ですよ

女性 あ…は、はい…

女性、ふたたび蚕の方へ手を出す
指が震えだす

女性 うう…ううう…

もと え？え？どうしたの

女性、座り込んで泣き出す

女性 無理です…

みと え？

女性 蚕が、気持ち悪くて、触れないんですううう

声を上げて泣き続ける女性

みと …あまりの出来事に、その場にいた誰も、どう声をかけていいのかわからなかった。皆、心の底から驚いたのだ。蚕がこわくて触れない人など、これまで一人もいなかった。この村では、蚕は身近な存在で、蚕をやらねば、生きていくことさえ難しかったのだ

目線を義母の方へやる

みと 特に、義母の落胆は大きかった。彼女に渡すために作業用のエプロンを夜なべして準備していた義母は、新しい人が来て、また養蚕を支えてくれることを、心の底から期待していたのだ

みと、義父の背を見る

みと その年の暮れ、義父は、とうとう養蚕をやめることを決めた

養蚕道具を運び、納屋にしまうのを手伝う動作

みと これはここでいいですか？

うん、と義父に返事をもらってから仕舞っていく

みと 「やめるのなら、道具は燃やしてしまうのがいい」と村の人に言われたものの、義父は、すべての道具を納屋に保管するという。よく晴れた初夏の日、ひとつを一家総出で運び込んだ。いつかの先祖が、竹や藁で作った道具。何度も直して洗って使った、私たちの養蚕道具

全て運び入れ、嬉しそうに見つめる様子

みと 誇らしげに道具を見つめる義父に、義母が言った
義母 いいんですか、残しておいて
みと すると義父は、小さな声でこう言った
義父 いつかまた、養蚕の時代が来るかもしれないだろう。―生き物を育てて、糸を取
って、布を織る。この営みが、完全になくなることはないさ

納屋の戸を閉める動作

みと こうして、養蚕の記憶は、暗い納屋の中に眠った

【第七章】

長い眠りから覚める身体

みと ……それから幾年経っただろうか。…どこからか、私を呼ぶ、声がする

何かの声が聞こえた気がして辺りを見回す

孫 ……ちやーん…おばあちやーん

孫、かけてきてみとの腕の中に納まる

孫 おばあちゃん、来たよ

みと 生命力のかたまりのような幼子が、腕の中にいる。蚕とも、糸とも全く関係のな
い、モダンな名前がついた孫

孫 お母さんが、おばあちゃんに、あの建物を見てって言った

孫、みとの手を引き歩き出す

みと もうすっかり老朽化が進んだ家を、どうするかを考えなければならぬ。取り壊
して更地にするか、この子たちのために新たにするか

納屋の前まで来て、えいやと戸を開ける

もと　そこには、つい先日運び込んだように、この家の道具たちがいつかのままの状態
で、あった

はっとして、納屋の中の道具のひとつに手を伸ばす

もと　「おばあちゃん、これなあに」と孫が指す先に、大きな鉄の鍋がある。ああ、こ
れは…

もと、それを大事に抱え、納屋から出す
鉄鍋に水を張り、床に置く
ほかの道具も並べる
その前に礼儀正しく正座をする

もと　さあ、やるかね

もと、かつての座繰りの動きを体現する

もと　もう随分やっていないというのに、身体が全部覚えていた。孫の口から、わあ、
と明るい声が出る

動作を続けながら答える

もと　これはね、糸取りと言って、お蚕さんが吐いた糸を集めているんだよ。ばあばが
若かった頃は、家を出て工場にはたらきに行き、こうして毎日、たくさん糸を
取ったんだ

孫の顔を見る

もと　すると、孫が言った

孫　そっか、おばあちゃんは、かわいそうだったんだね

ぼかんとするもと

孫が部屋から駆けていくのを目で追う
視線を戻す

みと　　かわいいそう…？

じっと自分の手を見るみと

みと　　私は…かわいいそう…だったのか

過去を思い出すみと

その表情がふっと緩む

手は、静かに糸取りのしぐさをはじめ

徐々にその動作に熱が入り始める

みと　　あれは…いつかの祖母との会話だった

子どもに戻っているみと

祖母が糸引きをしているところを見ている

みと　　むかしむかしはわかったけれど、お蚕さんの新しいお話はないの。どうして間が

すっかりあいてしまったの

きぬ　　…そんなの当たり前よ。前までは武士の世だったろ。どうしたって、お蚕さんを

育てる世の中は、平和でなくちゃいけないよ。桑を切るのだって、男手が要る。

桑畑が爆弾で燃やされたら、蚕は飢えて死んでしまう。わかるだろう、お蚕さん

はどうやったって、平和でなければできないことよ

みとの動きが止まる

みと　　…平和で…なければ…

糸巻きから一本を引き、空にかざして見る

立ち上がり、何かを決意したように歩き出す

納屋から養蚕道具を出して、積んでいく動作

みと　　からっとした秋晴れの日、納屋から養蚕道具を出して、畑の真ん中に集めて置いた

みと、マッチで火をつける動作

火がつき、燃え上がる道具たちを見ている

りと 汗と涙のにじんだ道具は、あつと言う間に火に包まれて、その煙は、ぐんぐんとはるか頭上へ昇っていく

りと、天を見る

手を伸ばす

ふと自分の手に目が行く

微笑み、手をさらに先へと延ばす

りと ……おいおい

煙の向かう先を見つめている

りと ……おいおい……

いつまでも、いつまでも見詰め続けている

(完)